第二節　民事原告人ノ起訴

第百十條　重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立テヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第百十一條　被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマデ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

第百十二條　被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヿヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章　豫審

△參看　明治十六年三月太政官第八號布告

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ內書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得

第百十三條　現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルヿヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ効ナカル可シ

第百十四條　豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ

受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第百十五條　豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルヿヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日內ニ檢事起訴ヲ爲サヽル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スヲ妨礙ト爲ルヿナカル可シ

第百十六條　被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヿヲ得

第百十七條　檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルヿヲ得但二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヿヲ得

## 第一節　召狀

第百十八條　豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人モ卽時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クトモ出廷ノ日ヲ過クルヿヲ得ス

第百十九條　豫審判事召喚狀ヲ受クヘキ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示メ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルヿヲ得

第百二十條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

第百二十一條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

一被告人定リタル住所アラサル時

二被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スル、ノ恐アル時

三被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時

第百二十二條　勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

△參看　第五十九号布告

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置ベシ此旨布告候事

第百二十三條　勾留狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルヿヲ得其ノ求メテ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知スヘシ

第百二十四條　前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分

ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヿヲ請求ス可シ其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾留狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第百二十五條　豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルヿヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スヘシ

第百二十六條　勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキモノト思料スルニ非ラサレハコレヲ發スルコトヲ得ス

第百二十七條　豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付スヘシ

檢事ハ被告人ヲ責付スルヿナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キヿヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第百二十八條　收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルヿヲ得ス

第百二十九條　收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載スヘシ

一被告事件ノ概畧及ヒ加重減輕ノ摸樣アル時ハ其概畧

二其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條

三檢察官ノ意見ヲ聽キタルヿ

第百三十條　總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容

貌體格等ヲ明示スヘシ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印スヘシ

勾引狀拘留狀收監狀ハ巡査ヲシテ之ヲ執行セシム

第百三十一條　召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所囑ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送致セシム

第百三十二條　勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作リ巡査數人ニ分付スルヿアル可シ

前項令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第百三十三條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戶長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡査ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス搜索調書ヲ作リ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日沒後之ヲ爲スヿヲ得ス

△參看　明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候得共芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日沒後ト雖ヒ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸座敷ハ日出前日沒後ニ拘ハラス又搜索致シ苦シカラス

第百三十四條　豫審判事ハ被告人他ノ管轄地內ニ潛匿シタルヿヲ知リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルトキハ巡査ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事長ハ司法警察官ニ令狀

ヲ示シテ即時執行ヲ求ム可シ

△參看　明治十五年四月司法省丁第廿四號

治罪法第百三十四條ノ塲合ニ於テ豫審判事ヨリ巡査ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシムルハ上告事件殊ニ急速ヲ要スル時ニ限リ輙ク其處分ヲ爲スヘキモノニアラス又第百三十五條ノ塲合ニ於テ豫審判事ヨリ人相書ヲ發シ搜査及ヒ逮捕ヲナスベキ事ヲ請求スルモノハ專ラ重大ノ罪ヲ犯シタル被告人ニ對シテ發スルモノニ有之被告人所在ノ地ヲ覺知スル能ハザルトキハ罪ノ輕重ヲ問ハズ悉ク人相書ヲ發スルモノニアラサルナリ此等ハ兼テ注意アルベキ事ナレドモ猶ホ誤解無之樣爲念此段及内訓候也

第百三十五條　豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スル能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キ事ヲ請求スル能ヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第百三十六條　陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムヿヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第百三十七條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スル能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヿヲ得

何レノ塲合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第百三十八條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ之ヲ執行シタルヿ又執行スルヿ能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス

可シ

巡査ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第百三十九條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舍ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第百四十條　密室監禁ノ場合ヲ除ノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルヿヲ得書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人トノ之ヲ授受スルヿヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヿヲ得

第百四十一條　豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第百四十二條　監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

## 第二節　密室監禁

第百四十三條　豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第百四十四條　密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヿヲ許サズ食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者

ナシテ之ヲ給與セシム

第百四十五條　密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但シ十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヿヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

## 第三節　證據

第百四十六條　法律ニ於テハ被告事件ノ摸樣ニ因リテ有罪ナルノ推測ヲ定ムルヿナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證　調書証據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ懲憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第百四十七條　豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據懲憑ヲ集取ス可シ

第百四十八條　豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヿ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作リ之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

## 第四節　被告人ノ訊問及ヒ對質

第百四十九條　豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第百五十條　豫審判事ハ被告人ナシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用ユヘカラス

第百五十一條　書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若署名捺印スルヿ能サルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヿヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

△參看　明治十年十二月司法省丙第十六號達

治罪法中犯人證人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例ニ依リ拇印爲致候儀ト心得可シ此旨相達候事

第百五十二條　被告人其陳述ニ付キ變更增減ス可キヿヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第百五十三條　被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヿヲ得

第百五十四條　豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヿ人違ナキヿ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ摸樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヿヲ得

第百五十五條　書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其ノ對質ニ關スル部分ヲ讀聞ス可シ

第百五十一條第百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百五十六條　被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラザル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セザル時亦同シ

第百五十七條　通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百九十二條第百九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

## 第五節　檢證及ヒ物件差押

△參看　明治十四年十二月司法省丙第十五號達

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢證及ヒ物件差押ノ事件ニ付キ急速ヲ要スル場合ニ巡査ヲ同行シ又ハ所在ノ巡査ヲ使用スル儀モ有之候條豫テ可達置此旨相達候事

△參看　太政官第八十二號達

司法官吏ヨリ巡査及ヒ兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事

第一條　司法檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡査又ハ憲兵卒ヲ使用スルヿヲ得

但時機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルコトヲ得

第二條　前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ渉ル時ハ直ニ鎮臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルコトヲ得

第百五十八條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖ドモ臨檢ス可シ

第百五十九條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヿヲ證明ス可キ摸樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ摸樣ヲモ記載ス可シ

第百六十條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出

所及ヒ摸樣ニ因リ被告人ノ人違ナキヿ又ハ犯罪ノ摸樣ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第百六十一條　豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヿヲ得

第百六十二條　豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヿヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戶長ノ立會アルヲ要ス

第百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十三條　被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人



ヲシテ立會ハシムルヿヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヿヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヿヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ス可カラス

第百六十四條　家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第百六十五條　豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシムヘシ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載スヘシ

第百六十六條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヿヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス

可シ

第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十七條　豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヿヲ禁スルヲ得若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマデ之ヲ留置スルヿヲ得

第百六十八條　豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ依リ臨檢家宅捜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヿヲ得

△參看　明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヿヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヿヲ得

第百六十九條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヿヲ得但受取證書ヲ渡スヘシ前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付スル可シ

第六節　證人訊問

第百七十條　豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出スヘシ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタルモノ輕罪事件ニ付テハ各〻五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツコレヲ呼出スヘシ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシ

テ之ヲ呼出スヿヲ得

△參看　明治十四年九月廿日第四十號布告

豫審又ハ公判ニ付證人ヲ呼出サント請フモノアルトキハ裁判所ニ於テ其旅費日當等ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ

若シ被告人旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキトキハ治罪法第百七十條ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置ヘシ

第百七十一條　證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託スヘシ

第百七十二條　豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セザル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ尋問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ尋問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達スベシ

△參看　明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヿヲ許シタル處分ハ當分ノ內其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヿヲ得

第百七十三條　呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載スヘシ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セザル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルヿアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ廿四時ノ猶豫アル可シ

第百七十四條　證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因呼出ニ應スル

能ハサルヿヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ニ尋問スヿ可シ

第百七十五條　證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由メ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ卽時ニ出廷セシム可ヿヲ認可シ又ハ職務上已ムヿヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百七十六條　豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ言渡スヘシ其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヿアル可シ

第百七十七條　豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケザルヿ其呼出狀ヲ第百七十三條ノ規則ニ背キタルヿ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシヿヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十八條　證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヿヲ證明ス可シ

第百七十九條　豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齡職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第百八十條　豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳

述ヲ爲ス可キヿヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヿ能ハサル片ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第百八十一條　左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルヿヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヿヲ得

一民事原告人

二民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條　左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一十六歲未滿ノ幼者



二知覺精神ノ不充分ナル者

三瘖啞者

四公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五重罪事件ニ付シ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付公判ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免許ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條　證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十二條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辨護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十四條　證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト格別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第百八十五條　豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルヲ肯ゼザル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條　第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ就テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條　皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條　書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作可シ其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヿ又ハ爲サヽル事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條　豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更增減セントヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更增減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルヿ能ハザル時ハ其旨附記ス可シ

第百九十條　證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

## 第七節　鑑定

第百九十一條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニヨリ鑑定スルコトヲ得可キ者一名又ハ數名ヲ爲サシム可シ

第百九十二條　鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヿ及ヒ呼出ニ應セザル時ハ罰金ヲ言渡ス可キコトヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セザル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條　鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルコトヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ誓宣書ヲ添置ク可シ

第百九十四條　鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓ノ鑑定ヲ背セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但シ言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十五條　第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヿヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第百九十六條　豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第百九十七條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヿヲ得

第百九十八條　鑑定人ノ鑑定書ヲ作リ其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作リ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第百九十九條　鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置クヘシ

第二百條　鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

## 第八節　現行犯ノ豫審

第二百一條　豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヿヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ所分ヲ爲スコトヲ得

第二百二條　前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載スヘシ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致スヘシ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條　檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得罰金ノ言渡ヲ

為スコトヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルコトナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條　前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條　第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヿヲ得但令狀ヲ發スルヿヲ得ス

△參看　明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルコトヲ得サル旨記載有之候得共當分ノ内現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條　檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊



問シ調書ヲ作リ勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

△參看　明治十五年十一月太政官第五拾三號布告

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時内ト有之處已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内五日以内ニ於テスルコトヲ得

第二百七條　豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルコトヲ得

第二百八條　豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スコトヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條　撿事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及スト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スコトヲ得

第九節　保釋

△參看　明治十六年十一月司法省丙第八號達

保釋責付中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ付左ノ通各裁判所ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

丁第三十一號

保釋責付ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付保釋責付ヲ爲スノ際其旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ

但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條　治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ屆置ク可キコトハ言ヲ待タス其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルコトヲ得ス若シ

己ムヲ得サル事由アルトキハ其旨ヲ撿事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條　裁判所ノ管轄地內ト雖トモ住所外ニ於テ一泊以上滯在スルトキハ滯在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ

若シ同居人アラザルトキハ其住所ノ地ノ戶長ニ屆置ク可シ

第三條　代言人辨護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルコトヲ得ス

第四條　治罪法第百二十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其責付ヲ受ケタル者モ亦同シ

第二百十條　豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ撿事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出シニ應シ出延ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第二百十一條　前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條　保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條　保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第二百十四條　保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入スヘシ

第二百十五條　保證金ヲ沒入スルニハ撿事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲スヘシ

若他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスル時ハ撿事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ撿事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條　豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡

又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消タル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條　豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

△參看　明治十四年九月廿日第四十七號布告

第一條　被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシム可キノ證書ヲ裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條　責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條　被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

## 第十節　豫審終結

第二百二十條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヿナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條　檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヿヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯ゼサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條　豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハズ後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヿヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル時ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事

ニ交付ス可シ

第二百二十四條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一犯罪ノ證憑充分ナラサル時

二被告事件罪ト爲ラサル時

三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四確定裁判ヲ經タル時

五大赦アリタル時

六法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十五條　被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放



ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條　被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヿヲ得

第二百二十七條　被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キコト

ヲ記載ス可シ

第二百二十八條　豫審終結言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヿ公訴受理ス可カラサルヿ及其原由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模樣證憑ノ充分ナルヿ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條　前條ノ言渡書ニハ第百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ



第二百三十條　書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ撿事民事原告人及被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

第二百三十一條　被告人ヲ逮捕スルヿ能ハサル塲合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非レハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百三十二條　前條ノ塲合ニ於テ撿事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押可キヿヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條　豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナル報告書ヲ差出ス

可シ

## 第四章　豫審上訴

第二百三十四條　左ノ場合ニ於テ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得

一管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サヽル時

四越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スコトヲ得

第二百三十五條　故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日內ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條　故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スコトヲ得

第二百三十七條　左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルヿヲ得

一豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時

二豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條　忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヿヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條　豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スヿヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條　豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス

又タ急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヿヲ得

第二百四十一條　會議局ニ於テハ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヿヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十二條　豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由アルヿヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條　會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタ

ル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖トモ更ニ取調ヲ爲スコトヲ得

第二百四十四條　書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヿヲ得

第二百四十五條　檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヿヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヿヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條　檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

輕罪裁判所又ハ違輕罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十七條　故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條　檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日內ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日內ニ答辨書ヲ差出スヿヲ得

第二百四十九條　故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スヿヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

第二百五十條　豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條　書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條　會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第二百五十三條　會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條　會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理ス可カラサルヿヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スヿヲ得

第二百五十五條　會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルヿ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受サル者アルヿヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判

決ス可シ

第二百五十六條　故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ撿事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條　撿事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第二百五十八條　被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キヿ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フヿナカル可シ

第二百五十九條　第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

△參看　明治十五年五月司法省丙第十八號

治罪法第二百六十條ノ場合ニ於テ被告人ヲ重罪裁判開廳ノ地ノ



監倉ニ移ス時ハ撿事ハ前令狀ニ撿事長ノ命令書ノ寫ヲ添テ重罪裁判所撿察官ニ送致シ其撿察官ハ是等ノ書類ヲ其他ノ監倉長ニ示シテ被告人ヲ收監セシムルノ處分ヲナスベシ其他法律ニ從ヒ被告人ヲ他ノ監倉ニ移ス場合ニ於テモ此例ニ準スル義ト心得ベシ此旨相達候事

第二百六十條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ撿事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所撿事長ニ送達ス可シ

撿事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ撿事ニ命ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ撿事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十一條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確

定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルヿナカル可シ但新ナル證憑アル時ハ此限ニ在ス新ナル證憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

## 第四編　公判

### 第一章　通則

第二百六十二條　訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルヿヲ得

△參看　明治十八年九月太政官第三十一號布告

明治十四年九月第四十四號布告及ビ同年十二月第八十號布告ヲ廢止シ違警罪卽決例別紙ノ通制定ス

（別紙）

違警罪卽決例

第一條　警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地內ニ於テ犯シタル違警罪ヲ卽決スベシ但私訴ハ此限ニ在ラス

第二條　卽決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證憑ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條　卽決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條　即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條　正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條　警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條　第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條　科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條　科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ壹圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條　拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ壹圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サヽル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ヲ避クルコトヲ得ス

第十一條　保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ沒入シテ本刑ニ換フ

第十二條　留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條　留置ノ日數ハ一日ヲ壹圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

△參看　明治十四年九月第四十四號布告

違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖トモ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計ラヒ其裁判言渡ニ付テハ總テ上訴ヲ許サス此旨布告候事

明治十四年十二月第八十號布告

本年九月第四十八號布告左ノ通改正ス

違警罪ノ儀ハ本年第三十六號布告ニ據リ明治十五年一月一日ヨリ治安裁判所ニ於テ裁判スヘキ處當分ノ内府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判セシムヘシ

△參看　明治十八年十二月司法省丙第十號達

明治十五年三月當省丙第十二號ヲ以テ違警罪裁判言渡書ノ謄本又ハ其抜書ヲ下附ス可キ費用ハ當分徵收ス可カラサル旨相達置候處本年九月第三十一號ヲ以テ違警罪即決例公布相成候ニ付テハ自今該裁判ノ正式ニ係ルモノハ該費用ヲ徵收シ其即決ニ係ルモノハ從前ノ通取計フベシ此旨相達候事

第二百六十三條　重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ラサル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第二百六十四條　被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ渉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルヿヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條　被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルヿナシ但守卒ヲ置クヿアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯

セザル時ハ之ヲ引致スルヿヲ得若シ出廷シテ辯論スルヿヲ肯セザル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條　被告人ハ辯論ノ爲メ辨護人ヲ用ルヿヲ得辨護人ハ裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代言人ニ非サル者ト雖モ辨護人ト爲スヿヲ得

第二百六十七條　被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辨論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スルヿヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辨論及ヒ裁判言渡ヲ爲スヿヲ得

若シ辨論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條　被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヿ能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辨論ヲ停止ス

辨論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辨論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辨論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辨論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辨論ヲ終タル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スヿナク裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲可カラス

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヿ能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限內ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戶長

ニ送達ス可シ

第二百七十條　闕席シタル被告人ニ付テハ辨護人ヲ用フルヿヲ許サス但其親屬故舊ハ被告ノ出廷スルヿ能ハサルノ事由ヲ證明スルヿヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヿヲ得

第二百七十一條　被告人中ノ一名又ハ數名出廷セズト雖モ出廷シタルモノニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條　裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ

稱讃誹謗其他辨論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヿヲ得

第二百七十三條　公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ



其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條　前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ヘシ輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條　公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

ニ送達ス可シ

第二百七十條　闕席シタル被告人ニ付テハ辨護人ヲ用フルヿヲ許サス但其親屬故舊ハ被告ノ出廷スルヿ能ハサルノ事由ヲ證明スルヿヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヿヲ得

第二百七十一條　被告人中ノ一名又ハ數名出廷セズト雖モ出廷シタルモノニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條　裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ

稱讃誹謗其他辨論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヿヲ得

第二百七十三條　公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ



其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條　前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ヘシ輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條　公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラス但辯論ニヨリ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヿヲ得

第二百七十七條　檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理スヘカラサルノ申立ヲ爲スヿヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理スヘカラサルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第二百七十八條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條　檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヿヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條　忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條　忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條迄ニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條　忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條　公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條　裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヿヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ効ヲ有ス

第二百八十五條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書說明ノ爲メ之ヲ呼出スヿヲ得

△參看　明治十五年三月廿二日司法省丙第十號

治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官ヲ證人トスルトキハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハズ書記ノ次席ニ付テ陳述スヘシ此旨相達候事

第二百八十六條　豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サヽル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサルトキ又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キトキハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヿヲ得

第二百八十七條　第二百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條　證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辨論ニ立會フ可カラス

第二百八十九條　證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一　檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二　民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三　被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條　證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第二百九十一條　證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヿヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヿヲ得

訴訟關係人ハ辨論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キヿヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條　證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヿヲ得

第二百九十三條　證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一　違警罪事件ニ付テハ五十錢以上壹圓九十五錢以下ノ科料

二　輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖ヒ科料罰金ヲ言渡ス可カラス

第二百九十四條　本條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヿ能ハザリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條　證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サヽル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條　證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヿヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條　第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人モ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ說明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條　被告人聾者啞者又ハ國語ニ通サセル者ナル時ハ第百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條　被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第三百條　證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辨護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヿヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辨論ヲ爲スヿヲ得但辨論ノ最終ニハ被告人又ハ辨護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條　檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條　辨論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第三百三條　民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヿヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルヿヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第三百四條　裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條　無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ

犯罪ノ證憑ナキヿヲ明示ス可シ

第三百六條　裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヿヲ得

△參看　明治十五年七月司法省丙第二十六號達

治罪法第三百七條第二項公訴裁判費用官ニ於テ擔當スヘキ場合該金額ハ裁判所ヨリ支出スル義ト心得ベシ此旨相達候事

但シ從前ノ場合內訓本文ニ抵觸スル件々ハ取消候事

第三百七條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ノ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當スヘシ

第三百八條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條　本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限內又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條　禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非ザレハ上訴ヲ爲スヿヲ得ス

第三百十一條　勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條　訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因失ヒタル權利ヲ回復スルヿヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限內ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條　書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ

對手人ハ三日內ニ答辨書ヲ差出スヿヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヤヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ卽時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條　裁判言渡ハ辨論ヲ終リタル後公廷ニ於テ卽時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作リ書記ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其抜書ヲ求ムルヿヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時內ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條　對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヿ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヿ

及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條　書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作リ左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一裁判ヲ公行シタルヿ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヿ及ヒ其事由

二被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヿ若シ宣誓ヲ爲サヽル時ハ其事由

四原被ノ證據物件

五辨論中異議ノ申立アリタルヿ後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヿ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六辨論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發見セシメタルヿ

第三百十八條　公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辨論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヿヲ記載ス可シ

辨論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條　公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條　裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

## 第二章　違警罪公判

第三百二十一條　違警罪裁判所ニ於テ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移ス旨ノ言渡

第三百二十二條　呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲメ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サヽル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヿヲ得

第三百二十三條　呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條　違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヿヲ得

第三百二十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百二十六條　書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條　違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條　違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條　被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヿヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條　呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セザル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受タル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條　裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヿ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條　故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第三百三十五條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ。

第三百三十六條　被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條　被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヿヲ得

第三百三十八條　違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヿヲ得

△參着　明治十四年九月第四十五號布告

刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ控訴又ハ上告ヲ爲ス者アルトキハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ

豫納セシム可シ若シ豫納スル能ハサル片ハ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ許サス

一被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條　控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ



第三百四十條　訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條　控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條　控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヿヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヿヲ得

第三百四十三條　控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定

メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヿヲ得ス

第三百四十四條　控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡シヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヿヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條　第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條　檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

△參看　明治十四年九月第四十四號布告

違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フ可シト雖モ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ內便宜取計ヒ其裁判言渡ニ付テハ上訴ヲ許サス

同年九月第四十五號布告（全文ハ第三百三十八條ニ揭ケタルヲ以テ畧ス）

## 第三章　輕罪公判

第三百四十七條　輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條　呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條　被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得

第三百五十條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條　第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條　檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アリタル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百五十三條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辨ヲ爲スヿヲ得

第三百五十四條　罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スヿヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條　闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條　闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被

告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヿヲ得

一被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヿヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヿヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スヿヲ得

第三百五十七條　裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヿヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經ザル事件ニ付テハ豫審判事ヲメ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出シムルヿヲ得

第三百五十八條　犯罪證憑充分ナラザル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條　被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受タル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條　被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人拘留ヲ受ケタル時ハ拘引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致スヲ可シ

第三百六十一條　被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條　會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ發見スルヿナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條　前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲コトヲ得

第三百六十四條　被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第三百六十五條　檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從カヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルコトヲ得

△明治十四年九月第四十五號布告(第三百三十八條參看)

一檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡有タル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

△參看　明治十八年一月太政官第二號布告

明治十四年十二月第七拾四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ抵觸スル條件ハ當分ノ内施行セス

第一條　控訴ハ治罪法中本按ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖モ總テ本按ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二條　控訴ノ期限内ハ控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三條　被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條　被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條　治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ於テ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

第三百六十六條　控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日内ニ之ヲ爲スヿヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヿヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日内ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條　控訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條　第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之レヲ適用ス

第三百六十九條　輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條　控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條　檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

△明治十四年九月第四十五号布告（第三百三十八條參看）

## 第四章　重罪公判

第三百七十二條　重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移ス言渡

二　控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其ノ事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

△參看　明治十五年三月司法省丁第十三號達

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク片ノ手續等ニ付本年一月第七十二號ヲ以テ內訓ニ及置候處其重罪事件ニ係ル事實ノ探討若クハ此ニ關スル景況ノ通報等ハ右始審裁判所檢事ヲシテ其取調ヲ爲サシムルモ總テ是迄ノ通治罪法第七十六條幷明治十四年當省丁第三十四號達ニ據リ控訴裁判所檢事長ニ於テ之ヲ調成シ差出スヘキ事ト心得ヘシ爲念此旨相達候事

第三百七十四條　控訴ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一被告事件始末及ヒ加重減輕ノ模樣

二被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地

三豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑

四罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條　公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條　重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數個ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辨論ヲ爲スヿヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數個ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辨論ヲ爲サシムルヿヲ得又數個ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辨論ヲ爲サシ

ムルヿヲ得

第三百七十七條　書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條　重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヤヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所ノ所屬ノ代言人中ヨリ選任ス可シ

被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヿヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヿヲ得ス

第三百七十九條　辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリコレヲ改選ス可正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條　書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作リ辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヿヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條　辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヿ

アリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヿヲ得ス

△參看　明治十五年第一号布告

治罪法第三百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカルヘシト有レ之候得共其裁判所々屬ノ代言人無レ之場所ニ於テハ當分ノ内辯護人ヲ用ヒザルモ其刑ノ言渡無効ノ限リニ在ラズ

第三百八十二條　辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヿヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閲讀シ且之ヲ抄寫スルヿヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヿヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受タル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條　檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條　前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クヿヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキヿヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百八十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條　裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廳スヽ可キヿヲ陳述スヽ可シ但被告人ヲ呼出スヽ可カラス

第三百八十七條　裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所ヤ在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ヲ爲スヿヲ得

第三百八十八條　裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後卽時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲スヽ可シ

第三百八十九條　書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツヽ可シ其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條　裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヿヲ被告人ニ告知スヽ可シ

第三百九十一條　裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問スヽ可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サヽル可カラス

第三百九十二條　裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヿヲ得可キヿヲ被告人ニ告知スヽ可シ

第三百九十三條　裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル每ニ被告

人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條　證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ

但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラズ

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ裁判ヲ訊問スルヿ又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルヿヲ請求スルヿヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヿヲ得

第三百九十五條　裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヿヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヿヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ



第三百九十六條　裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヿヲ言渡ス可シ

第三百九十七條　檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヿヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條　辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヿヲ辯論スルヿヲ得

第三百九十九條　前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ原告人辯護人及ヒ民事擔當人

ハ答辯ヲ爲スヿヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヿヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條　被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條　辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セザル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲナサシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條　檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百四條　闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聞ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辯スルヿヲ得

第四百五條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條　闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヿヲ得ス民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百七條　闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日內ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條　故障ノ申立闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條　闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

## 第五編　大審院ノ職務

### 第一章　上告

第四百十條　檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヿヲ得

△參看　明治十四年九月第四十五号布告（第三百三十八條參看）

一法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二裁判所ノ搆成規則ニ背キタル時

三法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヿヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ處分アル時

△參看　明治十九年六月　勅令第四十六号

罰金及追徵ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サントスルトキハ其罰金及追徵金ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ上告趣意書ニ添ヘ原裁判所書記局ニ預置ク可シ否ラサレハ上告ヲ爲スコトヲ得ス若シ上告不當ナルトキハ大審院ニ於テ其全部又ハ幾分ヲ沒入スルノ言渡ヲ爲スヘシ

第四百十一條　免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヿ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖ヒ上告ヲ爲スヿヲ得ス

第四百十二條　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關ス

ル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十二條ニ定メタル原由ニ付上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十三條　上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

大審院事檢長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十四條　上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條　豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條　上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時內ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條　上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日內ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時內ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條　對手人ハ上告趣意書ヲ受取タルヨリ五日內ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時內ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條　檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ又同シ

第四百二十條　書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其ノ裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヿヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條　上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヿヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條　院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意ヲ付ス可カラス

第四百二十三條　上告申立書及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヿヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條　書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條　開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ撿事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條　上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サヽル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲スヘシ

第四百二十七條　大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條　大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條　擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セラルヽニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタルトキハ其事件ヲ移スコトナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條　豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルヽアリト雖ヒ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサヽル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヽナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條　豫審又ハ公對ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條　大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條　大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條　法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百三十五條　法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スヿヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破段シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條　左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヿヲ得

一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サヽル時

三同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條　哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタル日ヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條　大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ判決アルマテ執行ヲ停止ス

## 第二章　再審ノ訴

第四百三十九條　再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スヿヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルヿヲ證明シタル時

四被告人ノ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ僞造又ハ錯誤アルヿヲ證明シタル時

第四百四十條　再審ノ訴ヲ爲スヿヲ得可キ者左ノ如シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官



二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長

三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

四刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條　再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得

第四百四十二條　再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘテ之ヲ大審院檢事長ニ差出スヘシ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ爲サ

ントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條　大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條　大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條　大審院ニ於テ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條　死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條　再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ掲示公告ス可シ

## 第三章　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條　通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルヿ能ハサル時ハ檢察官其訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヿヲ得

大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヿヲ得

第四百四十九條　裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之レヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條　大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條　犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十二條　公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條　大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クヿナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條　被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ摸樣ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヿ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十五條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スヿヲ得

所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヿヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第四百五十六條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出スヘシ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日內ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第四百五十七條　大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時

ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

## 第六編　裁判執行復權及ヒ特赦

### 第一章　裁判執行

第四百五十九條　重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條　死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日內ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條　死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條　刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

△參看　明治十四年十二月司法省丁第二十五號達

治罪法第四百六十二條第二項罰金科料費用及ヒ沒收物品ノ徵收ハ書記局ニ於テ之レヲ擔當シ會計主任ニ引渡ス儀ト可心得此旨相達候事

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分スヘシ

第四百六十三條　死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テコレヲ定ム

第四百六十四條　裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作リ左ノ條件

ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二罪名刑名

三再犯

四裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條　既決犯罪表ハ二通ヲ作リ一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作リ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判ニ於テ本犯ナルヿヲ認定スル能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヿヲ得

第四百六十八條　前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ

但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條　賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還スベキ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

## 第二章　復權

第四百七十條　復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條　復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一　裁判言渡書ノ謄本

二　主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルヿヲ證明スル書類

三　假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四　賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五　過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條　檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添之レヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條　檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ヲ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條　司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條　勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ

一　前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スヿヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條　復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

## 第三章　特赦

第四百七十七條　特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヿヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏スヘシ

第四百七十八條　司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スヿヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條　特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條　特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

△參看　明治十九年四月司法省令丙第六號

刑事裁判言渡ヲ犯人本籍ヘ通知方ノ儀明治十四年當省丁第三十三号ヲ以テ相達置タル處自今帶勳者ノ犯罪ニ付勳章ヲ褫奪シタル時ハ其旨併セテ通知ス可シ

△參看　明治十九年七月閣令第十九

明治十六年九月第三十九号　勳章年金褫奪及停止取扱手續ヲ改正スルコト左ノ如シ

勳章年金褫奪及停止取扱手續

第一條　勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ルヽトキハ榮譽ヲ汚辱シタルモノトス

第一項　重罪ノ刑ニ處セラレタル者

但輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者ハ其所犯ノ情狀ニヨル

第二項　賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

第三項　懲戒例及免黜條例ニヨリ免官セラレタル者

第四項　素行修ラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者

第二條　第一條第一項ニ觸ルヽ者輕罪ヲ犯シタル者ナルトキハ裁判確定ノ後裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ宣告書寫ヲ添ヘ其旨ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ普通刑法第三十一條第二十二條陸軍刑法第二十八條第二十九條海軍刑法第十七條ニ依リ處分ス

第三條　第一條第二項第三項第四項ニ觸ルヽ者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨリ其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第四條　賞勳局總裁ハ其具申ヲ審査シ重禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ハ直ニ上奏シ其輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ第一條第二項第三項第四項ニ觸ルヽ者ハ議定官ノ會議ニ於テ其褫奪ノ當否ヲ論定ス褫奪スヘキ者ハ奏請ス

第五條　褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作リ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヘ通知スヘシ

第六條　勳位進級セシ者ナルトキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪スヘシ年金票モ亦同シ

第七條　褫奪シタル勳章勳記年金票ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局ヘ還納スヘシ但其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ニ係ル

トキハ其宣告書寫ヲ添フヘシ

第八條　勲章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ其年月日及事由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ賞勲局總裁ヘ具申スヘシ

但公訴權消滅シタルトキ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルトキハ亦其事狀ヲ詳記シテ之ヲ申告スヘシ

第九條　重罪輕罪ヲ犯シ未ダ其訴ヲ受ケズト雖ヒ現ニ拘留セラレタルトキハ檢察官ヨリ前條ノ手續ニ從ヒ賞勲局總裁ヘ具申スヘシ

第十條　外國勲章佩用免許狀ヲ沒收スルトキモ亦總テ此手續ニ準據スヘシ

鼇頭註釋　大日本治罪法　終

# 監獄則目錄


第一編

第一章　汎則　自第一條至第七條

第二章　監署ノ規程　自第八條至第三十五條

第三章　監署ノ構造　自第三十六條至第四十一條

第二編

第一章　役法　附時限　自第四十二條至第五十條

第二章　工錢　自第五十一條至第五十七條

第三章　徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送　自第五十八條至第六十條

第四章　假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舍　自第六十一條至第六十二條

第三編

# 監獄則目錄終


第一章　給與　自第六十三條至第七十四條
第二章　疾病　附死亡　自第七十五條至第七十九條
第三章　書信　自第八十條至第八十六條
第四章　接見　自第八十七條至第八十八條
第五章　差入品　自第八十九條至第九十一條
第四編
第一章　教誨　自第九十二條至第九十五條
第二章　賞譽　自第九十六條至第百二條
第三章　懲罰　自第百三條至第百十三條




# 監獄則

## 第一編

### 第一章　汎則

第一條　監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一　留置場　裁判所及ヒ警察署ニ屬スルモノニシテ未決者ヲ一時留置スルノ所トス但時宜ニ由リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルコトヲ得

二　監倉　未決者ヲ拘禁スルノ所トス

三　懲治場　懲治人ヲ懲治スルノ所トス

四　拘留場　拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルノ所トス

五　懲役場　懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルノ所トス

六集治監　徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス

ル所トス

北海道ニ在ル本監ハ徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス

第二條　監獄ハ内務卿ノ管轄ニ屬ス但陸海軍ノ管轄ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス

第三條　集治監ハ内務卿之ヲ直轄ス留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ警視總監又ハ府知事東京府縣令之ヲ管理ス

第四條　此獄則ハ特ニ陸海軍ノ獄則ヲ以テ處スヘキモノニ適用スルヿヲ得ス

第五條　内務卿ハ毎年其所屬官吏ヲシテ各監獄ヲ巡閲セシムヘシ

警視總監府知事縣令ハ毎年三四次所轄ノ監獄ヲ巡閲スヘシ

裁判官檢察官ハ時々其裁判所ニ屬スル監倉ヲ巡閲スヘシ府縣會議員ハ臨時其府縣監獄ヲ巡閲スルコトヲ得

第六條　在監人ト稱スルハ未決已決ノ者及ヒ第十九條第三十條ニ記載シタル者ヲ云フ

第七條　在監人ヨリ司獄官吏ノ處置ニ對シ若シ情苦ヲ訴ヘントスルトキハ第五條第一項第二項ニ記載シタル官吏巡閲ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルヿヲ得

第二章　監倉ノ規程

第八條　司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ罰例ニ照シテ犯則者ヲ決責スルノ外恣ニ責罰スルヲ得ス

第九條　典獄看守長ハ日夜不時ニ監房ノ内外ヲ視察シ或ハ物件ヲ査閲シ其他囚徒ノ傲惰ヲ生シ脱越等ノ事ナカラシムルヲ要ス

第十條　新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ拘引狀拘留狀收監

狀又ハ處刑宣告書等ノ文書ヲ査閲シテ之ヲ領シ其領收ノ證ヲ引致シ來タル者ニ交付ス其文書ナクシテ引致セラレタル者ヲ入監スルヲ得ス

未決者ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法廷ニ引致ノ時モ同往セシムルヲ得ス

已決囚ハ第十六條ニ記載シタル差別ニ從ヒ其ノ監房ヲ別異ス

第十一條　入監ノ婦女乳兒三歲未滿ヲ携帶セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第十二條　新ニ入監スル者アルトキハ名籍ノ樣本ニ照シ其要領ヲ詳錄シ一小房内ニ於テ通身ヲ搜檢シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒クヘシ懲治人ノ監舍ニ入ルトキモ亦同シ

第十三條　總テ監房ニ入ルヽ物品ハ典獄一々之ヲ精驗シ其危險ノ虞アルモノハ一切之ヲ禁スヘシ

第十四條　總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊ニ記載シ典獄一々證印シテ之ヲ領置シ釋放ノ時還付スヘシ但點檢ノ際隱匿セシ貨物ハ沒收ス

若シ其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用ニ充ント請フトキハ之ヲ許ス

第十五條　在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ記載スルモノヲ除キ修身又ハ營業ニ必要ナルモノヽミヲ許スヘシ

第十六條　已決囚ハ各刑名ニ從テ其監房ヲ別異シ又其中ニ就テ左ニ記載シタル者ヲ別異ス

一十六歲未滿ノ者ト滿十六歲以上ノ者

二滿十六歲以上二十歲未滿ニシテ再犯以上ノ者ト同上ノ年齡ニシテ初犯ノ者

三初犯ノ者ト再犯以上ノ者

第十七條　要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル未決監ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス番號ヲ以テ之ニ換フヘシ但着衣ノ外襟ニ白布ヲ縫着シ其番號ヲ黑書シ監房ヲ出入スル毎ニ皂布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿チ共犯者ヲシテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルヲ得サラシム

第十八條　放恣不良ノ者ヲ懲治場ニ入レ矯正歸善セシメント其尊屬親ヨリ願出ルトキハ第二十條第一項ノ例ニ照シテ處分スヘシ」矯正歸善ノ爲メ懲治場ニ入ルヘキ者ノ年齡ハ滿八歲以上滿二十歲以下ヲ限リトス

第十九條　懲治人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一刑法第七十九條第八十二條ニ從ヒ懲治場ニ留置スル幼年ノ者及ヒ瘖瘂者



二尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入レタル者

第二十條　前條第二欵ニ記載シタル懲治人ハ戶長ノ證票ヲ具スルニ非レハ入場ヲ許サス但シ在場ノ時間ハ六個月ヲ一期トシ二年ニ過ルヲ得ス

入場ヲ請ヒシ尊屬親ヨリ懲治人ノ行狀ヲ試ル爲メ宅舍ニ帶往セント請フトキハ其情狀ニ由リ之ヲ許スヘシ

第二十一條　懲治人ハ左ノ年齡ニ從ヒ其居房ヲ別異ス

一十六歲未滿ノ者ト滿十六歲以上ノ者

二滿十六歲以上二十歲未滿ニシテ再ヒ懲治場ニ入シ者ト同上ノ年齡ニシテ初テ入場スル者

第二十二條　在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ處刑ノ宣告書其他必用ノ文書及ヒ領置ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ其發遣ノ途中ニ在テノ行狀ハ押送官吏之ヲ記述シテ典獄ニ知會スヘ

シ

在監人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ戒具ヲ用ヒ男ト女ヲ別ツヘシ但懲治人ハ戒具ヲ用ヒス

第二十三條　典獄ハ看守長及ヒ看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ錄サシメ賞罰ヲ行フノ考據トナスヘシ

第二十四條　賞表ヲ與ヘタルトキハ賞與簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ褫奪シタルトキハ之ヲ刪除スヘシ但其賞罰ヲ行ヒタル旨ヲ囚徒ニ示スハ第二十六條ノ例ニ依ルヘシ

第二十五條　特赦アリタルトキハ速ニ其旨ヲ內務卿ニ申報スヘシ

第二十六條　特赦ヲ受ケタル者アルトキハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ在テ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシメ仍ホ之ヲ揭示スヘシ



第二十七條　假出獄ヲ許サレタル者ニハ其證票ヲ與ヘ警察廳ヲ以テ其居住セントスル地ニ押送スヘシ

監署ニ領置セシ金錢ハ出獄者ニ携帶セシメズ其金圓ヲ錄シテ共ニ其地ノ警察官治罪法第六十條第二項ニ記載シタル官吏ニ送致スヘシ

△參看　明治十九年十一月內務省令第二十四號

刑法第七十九條第八十條第八十二條ニ依リ懲治場ニ留置セラレタル者ニシテ獄則ヲ謹守シ改悛ノ狀アル時ハ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ左ノ規則ニ據リ假ニ出場ヲ許スコトヲ得

假出場規則

第一條　假出場ヲ許スベキ者アル時ハ典獄ヨリ其長官ニ狀ヲ具シテ認可ヲ受ク可シ

第二條　假出場ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ其證票ヲ本人ニ下付ス可シ

第三條　假出場證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一　本人ノ屬籍氏名年齢住所懲治期限及ビ宣告並ニ滿期ノ年月日

一　殘期何年何月何日間假出場ヲ許ス「何年何月何日起何年何月何日滿」

一　本日出場ヲ許スニ由リ住居ノ地ニ歸着ノ上ハ卽時所轄警察署ニ其旨ヲ屆出ツ可シ

一　毎月一回謹慎ヲ表スル爲メ所轄警察署ニ到リ假出場證票ヲ出シ警察官吏ノ認印ヲ受ク可シ但己ムヲ得ザル事故アレバ其事由ヲ屆出可シ

一　一日程ヲ過グル地ニ旅行スル時ハ其行先並往復滯在日數等ヲ詳記シ所轄警察署ニ屆出可シ但其滯在一月以上ニ渉ル時ハ一箇月毎ニ其滯在地ノ警察署ニ到リ前項ノ手續



ヲナス可シ

一　事故アリテ其住居ヲ轉スル時ハ所轄警察署ニ屆出ツ可シ

一　第三項以下ノ事ハ本人自ラ爲ス能ハザル場合ニ於テハ親屬故舊代リテ之ヲ爲スコトヲ得

右ノ各項ニ違背シタルトキハ直チニ出場ヲ停止シ出場中ノ日數ヲ懲治期限内ニ算入スルコトヲ得ズ

第四條　假出場ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ假出場證票及懲治申渡書ノ謄本ヲ具シ本人住所ノ地ノ警察署ニ通知スベシ

第五條　警察署ニ於テ轉居ノ屆ヲ得タル時ハ之ヲ其轉居地ノ警察署ニ通知シ第四條ニ記載シタル書類ヲ遞送スベシ

第六條　假出場ヲ許ス可キ者住所ナク及ビ引取人ナキ時ハ猶懲治場ニ留置シテ他ノ懲治者ト嚴ニ別異ス可シ但住居遠地ニアリテ歸着スルノ資力ナキ者モ亦同ジ

第七條　假出場ヲ停止スベキ時ハ本人住居ノ地ノ典獄ニ於テ其旨ヲ言渡シ直チニ假出場證票ヲ取上ゲ其殘期ヲ執行ス可シ但甲地方ニ於テ下付セシ證票ヲ乙地方ニ於テ取上ゲタル時ハ其事狀ヲ甲地方典獄ニ通知シ證票ヲ送致ス可シ

第八條　假出場ヲ許サレタル其懲治期滿限ノ日ニ到レバ假出場證票ヲ所轄警察署ニ還納シ該警察署ヨリ證票ヲ出シタル典獄ニ之ヲ遞送ス可シ

第二十八條　假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其刑期間ハ典獄ニ於テ營業ノ方法ヲ指示シ其來署ヲ要スルトキハ召喚スルヲ得

第二十九條　在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ撰テ傳告者誘工者トナス傳告者ハ官吏ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘシメ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘セシム但傳告者誘工者ハ滿六箇月以上其用務ヲ繼續セシムルヲ得ス

傳告者及ヒ誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スルノ所爲アルヲ許サス

第三十條　刑期滿限ノ後賴ルヘキ所ナキ者ハ其情狀ニ由リ監獄中ノ別房ニ留メ生業ヲ營マシムルヲ得

第三十一條　刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期翌日午前第十時ヲ過ヘカラス

第三十二條　死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過ルヲ得ス其執行中ハ看守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

其遺骸ハ死相ヲ驗シタル後仍ホ二分時ヲ過サレハ埋葬若クハ下付スルヲ得ス

第三十三條　刑死者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ戸長及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ其

監署ニ領置シタル貨物ハ親属ニ下付ス若シ親属ナキトキハ遺骸ヲ領取シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣股ハ此限ニ在ラス

親属遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ遞付スルコトヲ得但シ送費ハ親属ノ自辨トス

若シ其物件又ハ代價ヲ受クヘキ者ナキトキハ之ヲ没收ス

第三十四條　在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ前條ノ例ニ依テ處分スヘシ但没收ハ逃走ノ日ヨリ滿一個年ヲ經ルノ後ニ非レハ之ヲ處分スルコトヲ得ス

領置ノ工錢ハ第五十七條ニ照シテ處分スヘシ

第三十五條　監獄ノ近境ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ司獄官吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避シムヘシ

水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ遑ナキトキハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルヲ得

## 第三章　監獄ノ構造

第三十六條　留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ毎府縣ニ置キ集治監ハ適當ノ地ニ之ヲ置クモノトス

留置場監倉懲治場拘留場懲役場一區畫内ニ在ルモノハ牆壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第三十七條　未決監已決監及ヒ懲治場ハ男監女監ノ別ヲ嚴劃スヘシ

甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼是交談シ又ハ物件ヲ交通スルノ便ヲ得サラシムヘシ各監房ノ鑰匙ハ其製式ヲ同シク甲乙適用スルヲ要ス

第三十八條　密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルコトヲ得サラシ

ムヘシ

闇室ハ已決監ニ設ケ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメサルヲ要ス

密室闇室ハ一室一人ヲ限トス

第三十九條　接見室ハ監舍ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之ニ縦横ノ格子ヲ嵌メ格子ヨリ三尺許ヲ距リ棚欄ヲ設ケ在監人ハ格子内ニ立シメ外人ハ格子外ノ棚欄ニ倚ラシムヘシ

但懲治人ノ接見室ハ此例ヲ用ヒス

第四十條　燈火ハ監房外ニ置キ障碍スルノ虞ナカラシムヘシ

第四十一條　死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ墻壁ヲ以テ外見ヲ防グヘシ

## 第二編

### 第一章　役法　附時限

第四十二條　定役ニ服スル者ノ作業ハ刑名ニ因テ之ヲ斟酌シ毎日一日ノ科程ヲ定メテ服役セシム滿十二歳以上十六歳未滿ノ者滿六十歳以上及ヒ病後ノ疲勞若クハ身躰ノ虚弱ニ因リ勞作ニ勝ヘサル者ハ體力ニ應シ作業ノ科程ヲ寛恕ス「若シ己ムヲ得ス外役ニ服セシムル時ハ鐵鎖ヲ用テ二囚毎ニ聯絆シ笠ヲ用テ晴雨ヲ問ハス其面ヲ掩ハシム但外役ノ囚徒ハ一組十人以上十五人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監セシム

外役ノ囚徒道路往來スル時ハ務メテ他人通行ノ妨ト爲ラサラシムルヲ要ス

第四十三條　毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ看守長及ヒ看守點檢ヲナスヘシ歸監セシムル時モ亦同シ

第四十四條　左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス父母ノ喪ニ遭フ者

モ亦一日免役ス

一月一日

一月二日　元始祭　孝明天皇祭

紀元節　春季皇靈祭　神武天皇祭　秋季皇靈祭　神嘗祭　天長節　新嘗祭

十二月三十一日



第四十五條　囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業手等ノ囚ヲシテ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授ルヲ要ス

第四十六條　定役ニ服セサル囚徒ト雖ヒ典獄之ヲ勸誘シテ其將來ノ生業ヲ計リ攝生又ハ親屬扶助ノ爲メ勞作セント請フニ至ラシムルヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ典獄ノ指示ニ依ル未決監ニ在ル者坐作ノ業ヲ爲サント請フトキモ亦同シ

第四十七條　懲治人ニハ敎誨ニ充ル爲メ服役時間表ニ準シ七時ニ過キサル時間休憩時間ヲ除ク農業若クハ工藝ヲ敎ヘ力作セシムヘシ

○時限

第四十八條　未決者及ヒ定役ニ服セサル已決囚ハ毎時日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎日一時間以內監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第四十九條　定役ニ服スル者ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ午飯セシム其起床ヨリ約子一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前十時前後ニ至テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス飯後暫時休憩シ再ヒ就役日沒前罷役セシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム但時宜ニ由リ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及ヒ就役罷役其他ノ動止ヲ令スルハ鈴若クハ拍ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

第五十條　科程ヲ終リタル者ハ時限ニ拘ハラス罷役セシム午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヲ驗視スヘシ若シ偷懶ニシテ怠役スルモノハ飯後休憩ヲ許ルサス

## 第二章　工錢

第五十一條　定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始テ各自ノ工錢ヲ科定シ之ヲ十分シ重罪囚ニハ其一分輕罪囚ニハ其二分ヲ與ヘ餘分ハ之ヲ監署ニ收ム

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決者ニ在ル者並ニ第十九條第一款ニ記載シタル懲治人ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ監署ニ收メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒ニシテ當日ノ科程ヲ畢リテ仍ホ作業スルモノ科程外ノ工錢モ又タ同シ

第五十二條　第十九條第二項ニ記載シタル懲治人ニシテ其尊屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者ハ其工錢ノ全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スル能ハサル者及ヒ第三十條ニ記載シタル者ハ工錢ノ內ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ

第五十三條　在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ留置シ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五十四條　各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應シ一日若干錢ト定ムヘシ

第五十五條　監署ニ留置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又ハ書籍其他必要ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヲ得

第五十六條　在監人死亡シ監署ニ留置ノ工錢アルトキハ第三十三條ノ例ニ照ラシテ處分スヘシ

第五十七條　在監人若シ逃走シタルトキハ已決囚ノ工錢ハ之ヲ沒收ス未決者及懲治人ノ工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬ナケレハ之ヲ沒收ス

## 第三章　徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒押送

第五十八條　徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者アルトキハ其宣告書ノ謄書ヲ具シテ內務卿ニ申報シ其指揮ニ從ヒ警察遞傳ヲ以テ集治監ニ押送スヘシ

北海道集治監ニ於テ管束スヘキ徒流刑ノ囚徒ハ本監官吏ノ臨時派出シタル地マテ押送スヘキモノトス

第五十九條　北海道ニ在テ集治監ハ毎歲三四次官吏ヲ派出シ前條第二款ノ例ニ從ヒ押送シタル徒刑流刑ノ囚徒ヲ受取ヘシ

第六十條　徒刑流刑ノ囚徒ヲ押送スル時ハ戒具ヲ用ヒ男囚ト女囚トヲ別ツヘシ遞船中ニ在テハ戒具ヲ用ヒサルモ妨ケナシ

## 第四章　假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舍

第六十一條　假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其地ニ居住スヘキ家ナキトキハ屋舍ヲ貸與スヘシ

屋舍ヲ搆造スルハ將來市街村落ヲ創置スルノ便ヲ計畫スルヲ要ス

第六十二條　假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒刑流刑ノ者其配偶者又ハ其他ノ親屬ヲ招キ同居セント請フトキハ典獄將來營生ノ方法ヲ取糺シ之ヲ許否スヘシ

前項ノ請ヲ許ストキハ其配偶者又ハ其他ノ親属現住スル地ノ戸長ニ通告ス可シ

其徒刑流刑ノ者嫁娶ヲ爲サントスルトキハ監署ニ申告セシメ典獄之ヲ許否スヘシ

## 第三編

### 第一章　給與

第六十三條　已決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス

第六十四條　未決者ノ衣類ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フ者ハ之ヲ許ス貧困ニシテ衣類ヲ自辨スル能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第六十五條　已決囚ノ獄衣ハ赭色トシテ懲治人ノ衣服ハ淺葱色トス

第六十六條　獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ別ツ男ノ通常服ハ長衣就役服ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス

獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫着シ之ニ番号ヲ墨書スヘシ

第六十七條　在監人ニ貸與スル衣類雜具

通常服

一　單衣
一　袷
一　綿入衣
一　襦袢

就役服

一　單短衣
一　袷短衣
一　綿入短衣
一　襦袢

一 股引
一 雑具
一 蒲團
一 蚊帳
一 莞莚
一 枕
一 帶（長三尺）
一 褌（長三尺）
一 手巾
一 簑
一 笠

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ澣濯補綴シテ其用ニ充ルヲ得



第六十八條　在監人一人一日ノ食糧

一 下白米十分ノ四合　強キ力業ニ服スル者
一 挽割麥十分ノ六合　輕キ力業ニ服スル者
同　五合　工役ニ服セサル者及ヒ滿十歳以上ノ未決者
一 同　四合　十歳未滿ノ幼者
一 同　三合
一 菜　金壹錢五厘以下

地方ノ便宜ニ依リ粟稗ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルヿヲ得

第六十九條　工業ニ勉勵シテ食費ヲ償フヘキ工錢ヲ得ル者及ヒ其幾倍ヲ得ル者等ヘハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金三錢ヲ過ルコトヲ得ス

定役ニ服セサル者ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金五錢ヲ過ルコトヲ得ス

第七十條　在監人日用ノ雜費澣濯補綴又ハ炊用ノ薪炭其他一身ニ係ル日常諸費ハ一人一

日金壹錢二厘以下トス

第七十一條　監房常置ノ器具

一　貯水器　木製

一　唾壺　同

一　便器　木製大小二種但監房ニ厠圊ノ接續スル者ニハ此器ヲ用ス

一　小箒　草ノ種類ヲ以テ製作セシ軟カナルモノ

一　洗手盆　木製

第七十二條　浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月マテハ五日毎ニ一次十月ヨリ五月マテハ十日毎ニ一次トス

第七十三條　已決囚及ヒ懲治人ノ髪ハ常ニ之ヲ短薙シ髭鬚アル者ハ常ニ剃除セシム但未決者ハ此限ニ在ラス

婦女ノ梳髪ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルヲ許サス

第七十四條　衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ澣ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之ヲ晒洗スヘカラス



## 第二章　疾病　附死亡

第七十五條　在監人疾病ニ罹レハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム

懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第七十六條　病者ノ攝養ニ効アリ飲食物又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ルコトヲ要スルトキハ醫師ヲシテ其旨ヲ證明セシメ典獄之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第七十七條　傳染病侵襲ノ兆アルトキハ其消毒豫防ヲ愼密ニスヘシ若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ病性及ヒ感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫師ノ診斷書ヲ副ヘ各其所屬長官ニ報告スヘシ

### 〇死亡

第七十八條　在監人死亡スレハ典獄看守長醫師幷莅テ之ヲ驗屍スヘシ

未決者ハ又已決囚ニシテ別故アリ再ヒ訊問ニ係ル者死亡シタルトキハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ

第七十九條　死者ノ親屬若クハ故舊第三十三條ニ記載シタル時限ヨリ二十四時以内ニ在テ遺骸ノ下付ヲ請フトキハ之ヲ許シ其者ヲシテ簿冊ニ署名押印又タ花押セシムヘシ

遺骸ヲ請フ親屬故舊ナキトキハ棺ニ入レテ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ其標ハ約子面三寸長三尺五寸トス

## 第三章　書信

第八十條　已決囚其親屬故舊ニ信書ヲ贈ルハ六個月間ニ一次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス但シ其他官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又タハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏ニ於テ法律ニ觸ルヽコトナク且必用ト認タルトキハ此限ニ在ラス

第八十一條　未決者ニ係ル信書ハ定限ナシ但豫審判事又ハ檢事ノ檢閲ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルヲ得ス

第八十二條　懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル信書ハ一個月一次トシテ一通ニ過ルコトヲ得ス

第八十二條　在監人ノ發スル信書ハ典獄之ヲ檢閲スヘシ若シ書中忌諱ニ渉ル等ノ文意アルトキハ通信ヲ許サス

第八十四條　外人ヨリ在監人ニ贈リ來タル信書ハ典獄之ヲ檢閲シ適正ノ事項ヲ陳ヘ又ハ遷善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限リ之ヲ本人ニ付與ス若シ在監人ノ改悛ヲ妨ルモノト認ルトキハ之ヲ付與セス

第八十五條　信書ヲ檢閲スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ横讀シ嫌疑ノ文意アリヤ否ヲ詳査スヘシ

第八十六條　在監人ヨリ發スル信書ハ必ス信書紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム

親屬故舊若クハ辨護人ノ信書ヲ監獄署ニ宛之ヲ差出サシムヘシ

## 第四章　接見

第八十七條　在監人ニ接見セント請フ者アル片ハ典獄先ツ之ニ面接シ其氏名族籍營業等ヲ訊ヒ其緣由ヲ詳悉シ已ムヲ得サル事狀アリテ形跡ノ疑フヘキフナキトキハ之ヲ許シ看守長看守竝茲テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サス

面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス

第八十八條　死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ集治監ニ押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條第一項ノ例ニ依テ之ヲ許ス但面會時間ハ五十分時ヲ過クルヲ得ス

## 第五章　差入品

第八十九條　未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服臥具又ハ飲食物炊烹ヲ要セサルモノニシテ一人一食ノ量ニ限ルヲ贈ラント請フトキハ之ヲ許ス但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノハ此限ニ在ラス

第九十條　已決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サス

第九十一條　假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者親屬故舊ヨリ金錢衣服家具等ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ

## 第四編

## 第一章　教誨

第九十二條　已決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ教誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム

第九十三條　教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ開クモノトス

第九十四條　懲治人ニハ毎日二三時間讀書習字算術度量圖畫等ノ科目中ニ就キテ之ヲ教フヘキモノトス

學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ表スル爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ノ良否氏名年齢等ヲ簿冊ニ記載シ巡閲官吏ノ撿閲ニ供シ又其尊屬親ニ示スコアルヘシ

第九十五條　各監房内ニ左ノ諸欵ヲ掲示シ傍訓釋義シテ解シ易カラシムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時内ニ於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

### 掲示

一在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ

一平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ愼テ容止ヲ正フスヘシ　未決監ニハ此欵ヲ除ク

一毎朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜スヘシ

一毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點撿ヲ受ケ及ヒ席壁圊厠等ヲ掃除スヘシ

一窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ヘ唾キ貯水ヲ濫用スルヲ禁ス

一監外ニ出タル時其途上ニ於テ仝往ノ者ト交談シ及ヒ手ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス

一夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ説話或ハ發聲又ハ濫リニ起歩スル

ヲ禁ス但晝間ト雖モ放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀スルヲ禁ス

一許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭博類似ノ惡戲ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ渉ルカ如キ所爲アルヲ禁ス

一服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩時間部外ノ工場ニ至ルヲ禁ス

一許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ス

一監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一日沒後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ

一獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタルトキハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ

一病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保ニ力ヲ致スヘキハ勿論其看病人タラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ

一水火風震等ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時內ニ監獄署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケサル者又ハ官吏ヨリ犯者ニ問フニ當リ之ヲ擧ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分スヘキモノナリ

年　月　日

某監獄署

## 第二章　賞譽

第九十六條　已決囚獄則ヲ謹守シ且改悛ノ行爲著キモノト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

第九十七條　賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣

ノ左袖肩臂間ニ方二寸曲ノ淺葱色ノ布ヲ縫着スヘシ

第九十八條　賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ考據トノ表面

爲スヲ得

第九十九條　賞表ヲ得タル者ニハ二個月ニ一次親屬故舊ニ接

見及ヒ通信スルヲ許ス

第百條　已決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄ニ

係ル水火災ヲ防禦シ人命ヲ救援シタル者アレハ金貳拾五錢以

下ヲ賞與シ其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請ニ由リ必用品又ハ

食物ヲ購求スヘシ但第九十七條ノ賞表ヲ與フルノ限ニ在アラ

ス

第百一條　未決監ニ在ル者前條ノ勞動アルトキハ之ヲ錄シテ檢

察官及ヒ裁判官ノ參考ニ供スヘシ

第百二條　懲治人第百條ニ適シタル勞動アルトキハ金貳拾五錢

以下ヲ以テ適宜物品ヲ購ヒ之ヲ與フヘシ

## 第三章　懲罰

第百三條　已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從フ

テ處罰ス

一絕信　親屬故舊ト書信接見ヲ絕ス

二屏禁　晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絕シタル監房ニ獨居セシ

メ服役時限表ニ照シテ座作ノ役ヲ科ス

三減食　常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜

ヲ與ヘス

四闇室　闇室ニ入レ常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二

品ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ臥具ヲ禁ス

第百四條　絕信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食闇室ハ七晝夜

ヲ限トス

減食闇室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ科スルコトヲ得

第百五條　懲治人及ヒ十六歲未滿ノ已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ改罰ス

一獨愼　晝夜一室ニ獨居セシム

二減食　常食ノ半以內ヲ減ス但菜ヲ減スルノ限ニ在ラス

第百六條　獨愼ハ七晝夜以內減食ハ三日以內トス

第百七條　未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者敎令ニ順ハス或ハ同監ノ者ヲ煽惑シ又ハ其他ノ規則ヲ犯ストキハ所犯ノ輕重ヲ量リ第百三條第百五條ニ準擬シ減食スルヿヲ得

第百八條　賞表ヲ有スル者處罰ヲ受タルトキハ賞表一個又ハ數個ヲ褫奪ス

第百九條　無期徒刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舍獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シ其他重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ三月以上五年以下兩脚又ハ一脚ニ釘ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ其釘ニ貫キ腰間ニ繚帶セシメ繚帶ノ所ニ下鍵ス但監房ニ在ルモ晝間ハ之ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハスモノトス其外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯袢ノ法ニ從フ

第百十條　減食或ハ闇室ノ罰ニ處スヘキモノアルトキハ醫師ヲシテ診視セシメ身體ニ妨ケナキヲ證シテ後之ヲ行フヘシ

第百十一條　屛禁減食闇室又ハ獨愼ノ罰ニ處シタル後ハ典獄若クハ看守長時々其動靜ヲ窺察シ狀況ニ由リ醫師及ヒ敎誨師

〔一〕此括弧ヲ付スル者及ビ下段ハ総テ朱字以下同ジ　四十二

ナシテ之ヲ問ハシムルコトアルヘシ

第百十二條　罰則ニ處セラレタル者改悛ノ狀著ルヽトキハ之ヲ免スルコトヲ得

第百十三條　假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者監署ノ命令ニ違背シタルトキハ七日已下之ヲ拘置スルコトヲ得

〔典獄(檢印)〕　懲治人名籍　主檢　書記〔氏名印〕

| | | | |
|---|---|---|---|
| 本管 | 國郡村町番地住何某男弟女妹 | | |
| 出生地 | | | |
| 族籍 | 何國郡町村產族籍 | | |
| 氏名 | 何某 | | |
| 年齡 | 某年月日生當何年何月何年何ケ月 | | |
| 懲治人及ヒ尊親屬ノ營業 | 懲治人ノ營業主願者タル尊屬親ノ營業 | | |
| 親屬 | 父母兄弟及ヒ配偶者等ノ有無 | | |
| 入場ノ年月日 | 明治何年月日午前後第何時入場 | | |
| 入場ノ事狀 | | | |
| 身材 | 長何尺何寸何分肥瘠强弱 | | |
| 容貌音聲 | 面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘班、瘊子、瘻瘤、黑痣、瘢風、天鯨、創瘢ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス | | |

教育及ヒ宗門　入場ノ時文字ナシルヤ否或ハ讀書ナナスヲ得或ハ善ク讀書ナナス」入場後進學ノ景況何宗或ハ宗門不詳

入場中ノ賞罰　明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ

書信贈答ノ月日　何年何月日國郡町村住親屬若クハ朋友ニ書信發來

懲治場ニ留置ノ宣告ヲナセシ裁判所　明治何年何月何日某裁判所ニ於テ若干月日留置ノ宣告

曩ニ處斷ヲ經シ者ナル時ハ其事由　犯由ノ大略及ヒ某裁判所

事變　明治何年月日病死或ハ變死或ハ逃走或ハ他監ニ移ス



放還　明治何年月日某家ニ放還

（典獄（檢印））　未決囚名籍　主檢　書記（氏名印）

本籍　某管下國郡町村番地住又ハ何某子弟妻女

出生地　族籍

氏名　何國郡町村產　何某

年齡　某年月日生　當何年何月何年何ケ月

營業及ヒ親屬　營業ヲ詳記スヲ可シ　父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無

乳兒提携　男或ハ女收監ノ時何歲何ケ月

| | |
|---|---|
| 入監ノ年月日時及ヒ罪件 | 明治何年月日午前後第何時入監何罪ヲ犯ス |
| 身材 | 長何尺何寸何分肥瘠強弱 |
| 容貌音聲 | 面體眉毛目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘班(イボ)、瘢子(コブ)、瘻瘤、黑痣(ホクロ)、瘢風(ナマヅ)、天鯨(アザ)、創瘢(キズアト)ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス |
| 教育及ヒ宗門 | 文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス何宗或ハ宗門不詳 |
| 入監中ノ賞罰 | 明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ |
| 書信ノ贈答ヲ許ス月日 | 明治何年月日何國郡町村住親屬若クハ朋友ニ書信發來 |



| | |
|---|---|
| 當該官ノ氏名 | 裁判長ノ名死刑ハ裁判長ノ外其行刑ヲ臨監セシ官吏ノ氏名 |
| 保釋付責 | 明治何年月日保釋若クハ責付 |
| 事變 | 明治何年月日病死或ハ變死脫監 |
| 終結 | 明治何年月日放免若クハ刑ノ宣告執行又ハ他監押送 |
| (典獄(檢印)) 已決囚名籍 | 主檢 書記 (氏名印) |
| 本管出生地 | 某管下國郡町村番地住又ハ何某子弟妻女族籍 |

| | |
|---|---|
| 族籍氏名年齢 | 何國郡町村産　何某　某年月日生　當何年何月何年何ケ月 |
| 營業及ヒ親屬 | 營業ヲ詳記スヘシ　父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無 |
| 乳提兒携 | 男若クハ收監ノ時何歳何ケ月　父母ニ先テ出監シ或ハ死去シタルトキハ之ヲ詳記ス |
| 刑名及ヒ宣告ノ月日裁判所ノ名稱 | 何刑若干年月日　明治何年月日何裁判所ニ於テ宣告 |
| 收監ノ年月日 | 明治何年月日午前後第何時入監 |
| 犯由ノ大略及ヒ犯數 | 財産ヲ竊取シ或ハ人ヲ毆傷スル等犯罪ノ大略ヲ記ス若シ再三犯ナレハ往年何罪ヲ犯シ某裁判所ニ於テ何刑ニ處セラル |



| | |
|---|---|
| 身材 | 長何尺何寸何分肥瘠强弱 |
| 容貌音聲 | 面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ恣態其他痘斑(アバタ)、猴子、瘻瘤(ホリロ)、黑痣、癩風(ナマズ)、天鯨(アザ)、創瘢(キズアト)ノ類及ヒ音聲(イボ)ノ高低(コブ)ヲモ細緻ニ具載ス |
| 教育及ヒ宗門 | 文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス何宗或ハ宗門不詳 |
| 入監中ノ賞罰 | 明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ |
| 書信贈答ノ年月日 | 明治何年月日何國郡町村住親屬若クハ朋友信書發來 |
| 假出獄免幽閉 | 明治何年何月何日假出獄或ハ免幽閉 |

| 事變 | 明治何年月日病死或ハ變死或ハ脫監或ハ何罪ヲ犯シ復タ未決監ニ入ル |
| --- | --- |
| 終結 | 明治何年月日滿期放免又ハ特赦 |



假出獄之證票

某縣下國郡町村番地住又ハ何某子弟妻女

族籍 何 某

某年月日生

明治何年何月何年何ケ月

身名籍ノ樣本ニ倣材ヒ詳記スヘシ

容貌

上ニ仝シ

罪質犯數

刑名刑期及ヒ附加刑

何年月日某裁判所ニ於テ宣告ヲ受ケ何年月日ヨリ執行何年月日滿期

一此者ハ假出獄ノ裁可アリタルヲ以テ本日出獄ヲ許シ何地ヲ通過シ居住スヘキ何地ヘ約子何日迄ニ到着シテ即時其地ノ警察官ニ屆出テ此證書ヲ納メタル上住宅ヲ定ムヘキ旨申渡シタル事

一此者ハ本刑期限間特別監視ニ付セラレタル事

一此者假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯スアルトキハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入セラレサル事

一此者發病其他ノ事變ニ因テ途中ニ滯留スルトキハ滯留地ノ警察官ヨリ其證書ヲ受ケ居住地ニ到着ノ上此證書ト共